

修士論文要旨

真宗ビハーラ活動の理念を根本とした 介護従事者についての一考察

野 村 廣 大

序 論

本 論

第1章 概説

第2章 仏教における死生観

第1節 釈尊における看取

第2節 浄土教における臨終行儀

第3節 親鸞聖人の死生観

第3章 真宗におけるビハーラ活動の姿勢

第1節 教義よりみる真宗ビハーラ活動

第2節 歴史的背景よりみる真宗ビハーラ活動

第4節 現場における活動者の姿勢

第4章 真宗ビハーラ活動を基盤とした社会福祉従事者について

第1節 医療、介護の現場における宗教者

第2節 介護従事者に求められる死生観

第3節 介護の教育現場で語られる宗教

第4節 具体的姿勢

結 論

序 論

浄土真宗本願寺派では、1987（昭和62）年に「ビハーラ活動」が始まった。「ビハーラ活動」とは、「仏教徒が、仏教・医療・福祉のチームワークによって、支援を求めている人々を孤独のなかに置き去りにしないように、その心の不安に共感し、少しでもその苦悩を和らげようとする活動である。」と定義されている。

医療現場には「患者の権利宣言」で「精神的な安定の面で宗教的慰安を受ける権利」に関する項目があり、1981年以来1995年・2005年と改訂が進むにつれこの権利が重要視されてきてい

る。文言は「霊的および倫理的慰安を受ける権利」から「患者は適当な宗教の聖職者…（以下略）」へ、さらに「患者は信仰する宗教の聖職者…（以下略）」という形に改訂され、2005年には「尊厳に対する権利」において「患者は、人間的な終末期ケアを受ける権利を有し、またできる限り尊厳を保ち、かつ安楽に死を迎えるためのあらゆる可能な助力を与えられる権利を有する」と「終末期医療」から「終末期ケア」と改訂され、宗教的支援についての重要性が語られている。実際の所、仏教を背景にもつ病院が少ないせいか、ビハーラが浄土真宗本願寺派の宗派活動という印象が強いのか、ビハーラ病棟をもつ病院は少ない。日本ホスピス緩和ケア協会の調査では2010年6月には緩和ケア病棟201施設中42施設において64名の宗教者がチームの一員として活動していると報告されている。宗教を背景とした施設が多いが、公立系の病院や大学病院でも活動している。また緩和ケア病棟がある病院だけでなく、緩和ケアチームとして活動する者、一般病棟や診療所で活動している者もいる。

しかし、日本では病院などで医療チームの一員として活動する宗教者の役割について明確ではなく、医療者の中にはその存在すら知らない場合もあり、宗教者がチームの一員となって活動することは困難である。

それに対し、介護施設における宗教活動については、施設として礼拝対象をおき、宗教行事や宗教講話を行い、入所者の葬儀を行うことは7割前後の施設が実施しており、仏教系の施設においては8～9割にも及んでおり宗教者が福祉・介護の現場に関わっていく環境的条件は整いつつある。

また、平成18年度の介護保険制度改正の中で「看取り介護加算」が創設されたことで、介護施設での看取りについて宗教的支援が求められることになった。宗教者が医療、福祉に関わる方法は様々考えられるが、本研究においては、社会福祉施設に所属する職員と同じ業務をこなすなかで、浄土真宗のビハーラ活動の理念を根本とした介護従事者であることによって、いかなる対象者観、社会観、ケア観など実践主体の基本スタンスが発揮できるか考察したい。

本 論

宗教者が社会福祉の業務に関わるということは、宗教者が社会福祉の政策下及び援助過程へ参入することを意味する。社会福祉の制度・政策や援助技術が有効に機能するためには、社会福祉学及び関連諸科学の成果に学び、その指示するところに従って運営・実施がなされなければならない。

しかし臨床面、特に対人援助サービスにおいては援助方法の科学的客観性・合理性・効率性のみならず自他関係の相互性や主体性の価値判断が厳しく問われる。したがって社会福祉従事者が宗教者であることの意味は、その宗教の思想や理念、その人の信仰が対象者観、社会観、

ケア観など実践主体の基本スタンスとして発揮され、実践を内面から支え、力強く方向づけていくものだと考える。

実際に、医療や福祉サービスに従事する人の宗教を排除するのではなく、従事する人の宗教心が医療や福祉の活動を促進する働きがあることは認められつつある。それにともない介護の教育現場において、介護の効率性、合理性のみに囚われず、宗教的信仰から自らの価値観・死生観を持って、利用者がよりよく生きるための支援をすること、看取りを行っていくことの出来る介護従事者が求められている。また、介護福祉士に求められる介護行為、その役割として宗教的側面があげられているが、現在の介護保険制度は、利用者の心身の状態を区分する基準の中に、宗教的情操の有無に関わる項目を設けていない。つまり現在の状況では、利用者の宗教的情操を支え、よりよく生きる支援をすることは介護従事者各々の価値観に委ねられるところである。

真宗ビハーラ活動の理念を根本とした介護従事者は、「不請の友」「常行大悲」の教えを聞く中に実践されると考える。

「不請の友」とは『大経』に菩薩の姿を説いて、

もろもろの庶類のために不請の友となり、群生を荷負して、これを重担す^①と説かれている。「不請の友」とは衆生の請願を待たずして自発的に悩み苦しむ人に寄り添い、痛みを分かち合おうとするまことの友のことである。病床についている人や、病人の介護に疲れきっている人の役に少しでも立とうという願いをもって行うビハーラ活動は、菩薩の行為は出来ないけれど及ばずながら「不請の友」となろうと志す活動である。それは相手を道具と見なし、私にとって役に立つかと計算してなす行為でなく、病む人の命の痛みに関心し、少しでも我が事として引き受けていこうとする行為でなければならない。

私たちに与えられているのは束の間の無常の「いのち」であり、生まれて今までの毎日がお互いにとって看取りあいであると考えるところに、同じ束の間の命に渾身の力を込めて生きる自身と対象者、またはその家族との間に「いのち」の痛みへの共感、少しでも我が事として引き受けていこうとする行為が生まれてくると考えられる。

また「常行大悲」とは、人間の手の届かぬところにまで、如来の大悲の手は確実にさしのべられているのだと聞くと、自分の無力さを悲しみながらも阿弥陀如来の大悲に応答して、大悲の本願に身をゆだね、その広大なはたらきに参加し、苦しむ人と連帯しつつ自他ともに大悲に包まれていることを讃仰するような身にならしめられることである。

結 論

「真宗ビハーラ活動」は相手の要請をうけて行動をおこすのではなく、その前にこちらから

何か行動をすること、いのちに対し共感的動機をもって対象者を援助していくことである。

「真宗ビハーラ活動」の実践者全員が、はじめから共感的動機をもって活動することは困難であると考え、『親鸞聖人御消息』に

もとは無明の酒に酔ひて、貧欲・瞋恚・愚痴の三毒をのみ好みしめてあうて候ひつるに、
ぶつのちかひをききはじめしより、無明の酔ひもやうやうすこしづつさめ、三毒をもすこ
しづつ好まずして、阿弥陀仏の薬をつねに好みめす身となりておはしましあうて候ふぞか
し^②。

とあるように、阿弥陀仏の救いを聞きよるこぶ者は、実践の中でも自身の有り様を知らされ、
至らなさ拙さを反省せしめられる。そして「及ばずながら」と少しずつ少しずつ「真宗ビ
ハーラ活動」の実践者としてあるべき姿となっていくことが出来る考える。

本論では、真宗のビハーラ活動者が社会福祉の政策下、援助過程に参入する場合に限定して
考察を進めてきたが、現在は介護老人福祉施設だけでなく、在宅での看取りが行われるよう
になった。それにともない死をむかえる場所が、自宅から病院、高齢者施設に移っていたものが、
また自宅へと戻りつつある。

「真宗ビハーラ活動」とは、看取りや介護施設での活動に限定されるのではなく、平生にお
ける真宗念仏者の実践へと展開すべき重要な問題である。

註

- ①『真聖全』 1・4頁『真宗聖典全書』 1・18頁『註釈版』 7頁
- ②『真聖全』 2・689頁『真宗聖典全書』 2・811頁『註釈版』 739頁

参考文献

- 梯実圓『教行信証の宗教構造』法蔵館 2001
- 田代俊孝『仏教とビハーラ運動』法蔵館 1999
- 樹心の会編『死を看取る心』永田文昌堂 1986
- ビハーラ活動実践研究会『ビハーラ活動』本願寺出版社 1993
- 谷山洋三・伊藤高章・窪寺俊之『スピリチュアルケアを語るⅠ・Ⅲ』関西学院大学出版会 2004
- 友久久雄『仏教とカウンセリングの理論と実践』自照社出版 2013
- 鍋島直樹『親鸞の生命観』法蔵館 2007
- 梯実圓『浄土教学の諸問題』上巻 永田文昌堂 1998
- 梯実圓『浄土教学の諸問題』下巻 永田文昌堂 1998

参考資料

- 長倉伯博「ベッドサイドに仏教がある風景」『病院72』2013
- 深水顕信「ビハーラ活動の現状と課題」『広島法學25』2001
- 早島理「改正脳死・臓器移植法と生老病死」『行信字報24』2011

- 早島理「ビハーラ活動者の現状と展望—本願寺ビハーラ活動者養成研修会のアンケート調査をもとに—」『浄土真宗総合研究』2011
- 打本弘祐「親鸞浄土教におけるスピリチュアルケア理論構築に向けて」『桃山学院大学社会学論集47』2013
- 内田富美江「介護福祉養成教育における死と看取り教育の必要性」『川崎医療短期大学紀要28』2008
- 谷山洋三「ビハーラとは何か？」『バーリ学仏教文化学19』2005
- 玉木興慈「親鸞思想における「常行大悲」の意味」『真宗学109・110』2004
- 福田洋子 徳山貴英 千草篤磨「特別養護老人ホームにおける「看取り介護」の現状と課題」『高田短期大学紀要31』2013
- 打本弘祐「スピリチュアリティ概念の多様性と宗教性」『真宗研究會紀要41』2009
- 松本幸枝「研究論文にみる「老人と死」から「介護教育を考える」」『植草学園短期大学紀要5』2004
- 鍋島直樹「浄土教における死と慈愛—ホスピスとビハーラの共通性と独自性—」Ⅰ『真宗学111・112』2005
- 鍋島直樹「浄土教における死と慈愛—ホスピスとビハーラの共通性と独自性—」Ⅱ『真宗学119・120』2009
- 鍋島直樹「親鸞とその門弟における死の受容—覚信・慶信との交流—」『真宗学91・92』1995
- 渡辺了生「親鸞教学における「ビハーラ」考」Ⅰ『真宗學95』1997
- 渡辺了生「親鸞教学における「ビハーラ」考」Ⅱ『宗学院論集70』1998
- 佐伯典彦「特養ホーム利用者への終末期の声かけに関する仏教的考察」『日本仏教社会福祉学会年報34』2003
- 藤腹明子「仏教ソーシャルワーカーの可能性を考える上で」『日本仏教社会福祉学会年報34』2003
- 熊澤利和「仏教ソーシャルワーカーの可能性を考える上で」『日本仏教社会福祉学会年報34』2003
- 長谷川匡俊「仏教と福祉の結合から見えてくるもの」『仏教51』2000
- 玉木興慈「親鸞の「現生正定聚」考—臨終来迎否定に関連して—」『龍谷大學論集462』2003
- 浅井成海「真宗伝道学の研究—親鸞の人間観と対人援助—」『佛教文化研究所紀要42』2003
- 葛野洋明「現代における真宗伝道の課題」『龍谷大学仏教文化研究所紀要50』2011
- 村瀬正光「緩和ケア病棟における宗教者の活動の現状」『日本仏教社会福祉学会年報43』2012
- 葛野洋明「真宗伝道における実践論の教義的研究」『真宗研究49』2005
- 秋山智久「社会福祉と宗教—実践の一つの源泉—」『學苑832』2010